
sweet Island ~妹達とお兄さん~

sorapon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sweet Island ～妹達とお兄さん～

【Zコード】

N7382Y

【作者名】

sorapon

【あらすじ】

主人公「高ノ富^{たかのみ}甲太^{こうた}」は3年前、仕事の関係で故郷の島を離れる父親と共に本州へと渡った。しかし3年間の間にいい思い出は無く、仕事を済ませた父親に言われた故郷へ帰るかという問いにすぐに肯定の返事をした。本州から船で40分、そこそこ広いが自然の多い目立つた産業のない田舎の島、赤垣島。故郷の家には三人の家族が居る。二人のクールな妹達と、甘えたがりな美人の母親。父親と共に船の上から甲太は、甘い明日に胸を躍らせていく。

注意 * 更新がかなり稀になると想います。期待しないで妄想しながらお待ちください。

今ジャンルがコメディじゃなく文学になつていい//スに気づいたのですが、いやこれ逆にミスじゃないのでは?つまり妹萌え=文学と

いうことを神様が教えるためにこんなミスを・・。

「なんぞや赤垣島！」

船の警笛が聞こえる。

島に着くまで後15分程か。

背中の荷物が重いけど、今の気持ちに比べれば全く問題ない。

風が気持ちいい、鳴き声を上げながら飛ぶ鳥達を見ると心が踊る。

3年ぶりの故郷だ。

そう思つと、昔別れた顔がいくつも浮かんでは消えていく。

「早く会いたいなあ」

本土のまゝでは、内氣で友達も少なかつた。
けどきっとここは違つ、普通にやれるはずだ。

「甲太、もうすぐ着くから準備しておけ」

「わかつてゐよオヤジ、準備は出来てる。」

背に背負つた大きなリュックの重みを感じる。
逆に言つなら、本土での思い出はこれだけだ。
島での思い出に比べたら、軽いことこのうえないな。

* * *

俺たち親子を含めて十数人といつ少し乗客を載せた船が港に着いてから数分。

「おいオヤジ、母さんと由美はどこだ」

「俺に聞くなムスコよ」

真夏の日差しの下、直立不動の一人の男。

俺が他人なら絶対に視線を合わせたくない何かがそこにある。

待ち合わせ場所がこんな日陰もないような、時計の下なんて所じやなければ……

俺たちの田が濁り始めた頃に、細かい傷があちこちに入った軽自動車が走つてくる。

そのままは暴走しているようで、俺は向こうでよくやっていたゲームのことを

「つてあぶねえつ！？」

「ああつつつう

オヤジがエコー付きの悲鳴（？）を上げてはねられる。
ああ、合掌。

「遅れでごめんねつ！？港にくるのなんて久しぶりだから迷っちゃつて！」

扉が勢い良く開いて、背の高いスレンダーな美人が出てくる。
「どうか、母親だ。

マザコンではないが、息子 eyo から見ても美人な母親だ。

「いいよ母さん、そんなに待つてもいないし。久しぶり

「あー」「君つー久しぶりー

さすがに抱きつきはしないが、手を握ってブンブンと振る。痛い。

「まて」「ムウスウ」「ウ ょー父より先に母と触れ合つとは何事だ!」

怪人海坊主が現れる。

どうやら落下地点が海だったらしい、惜しい。

「あなたつー!」

「マイスウイートハーヴィーチー

「1かくやといつ速度ですつ飛び。
ラブオーラをまき散らしながら、若干40半ばの夫婦が抱き合つ姿は一種恐怖を感じる。
特に親ともなれば。

「あれ、 そういえばコウトマコロ?」

「あれ? コーちゃん達先に行つたはずなんだけどなー?」

我が妹達の姿が見当たらない。

「ふつふつふ、久じぶりの愛しの父との再開が恥ずかしくて逃げてしまつたかな!」

「逃げたいよ、そこのラブオーラ夫婦と変態から!」

声が聞こえる、ビームだ。

視線を巡らせるごと、港の端、売店前の日陰にあるベンチで優雅に
くつりぐー一人の少女を見つける。

「おかえりなさい、兄さん」

「おかえり変態共」

艶やかな黒髪のショートボニーと、腰に巻きそつた長いロング
ヘアを揺らして一人がこちらに歩いてくる。

一人とも俺の妹、名を由美ゆうみと蘭子らんこだ。

ちなみに、マコ 蘭子、口が悪い方 は自分の名前が嫌いだ。
虫を連想するから。

久々に会つた二人は3年しか期間は空いていないのに、元、見
違えるほど美少女になつてゐる。

胸は一人とも発育しきつていながら。

「ただいまマイドウターブツ！」

父親が抱きつゝと飛びつくがよけられて海に帰る。そのまま海
坊主になればいい。

それを視界に入れないので、久々にあつた妹達に、最
上の笑顔を向ける。

これからは一緒に暮らすんだ、昔からベタベタとしている兄弟で
はなかつたから、これからはできるだけ仲良くしたい。

コウは少し不安そうに、マコは暑いのだろうか苛ついた表情だ。
これからよろしく そんな言葉を込めて、おかえりに返事をす
る。

「コウ、マコ

」

ただいま、これからようじく

家事が好きなわけじゃないけど

目覚ましに使っている、携帯のメロディで目が覚める。

時刻は5時45分、セットした時間とズレがある。

最近の携帯は五分前行動を心がけるのだろうか、初めて知った。取り敢えず目覚めはいいので、脱いで、着る。

女の子ならこれだけで数分かかるのだろうか、妹に聞いてみたいがマユに聞くとひどいことになりそうだ。

主に俺の心が。

「しつかしこの島は気持ちがいいなあ」

本土に居たときのマンションは窓から入る光すらなかつた。けど、島の家 今居る和風の部屋は風通しもいいし、明かりをつけていないのに明るい。

これが 充実感 。

何はともあれ、まずは家事をすることにする。

何故男の俺が家事をするかと言えば、昨日母に言われたからだ。以下再現。

「コ一君、コ一君」

「何、母さん」

「家事得意だつたよね?」

「うん、料理は自信あるよ、あと洗濯とお風呂洗いなら普通に」

「じゃあね、朝ごはん、これから毎日私のために作つて?..」

というわけだ。

もちろんわけの分からんプロポーズみたいな発言にはツッコミを入れた。

ここの家は、あの港から車で十分程しか離れていないため車のなかでは久々の再開を存分に分かちあえなかつた。

と言つより、妹達は気まずそうにしていたのだ。女だけで暮らしていたところに俺という男が来たからだろうか。

ちなみに皆さん何か言いたいかもしませんが、父は海に捨て置いた。

家に着くと以前使つていた、こぢりぱりとしてしまつて自室に荷物を運びこんで、手伝つて疲れたのだろうかユウはすぐに寝てしまつた。

マユは手伝いもせず部屋に戻つてしまつたのでわからないが、とりあえず昨日は夕飯抜きだつたため、俺はお腹がすいてる。

というわけで現在、家事実行中。メニューは特に変哲のない物だ。個人的には美味しければいいという、こだわりのないタイプなので和洋折衷だ。

他の皆の分も作つて置いて、自分は少しだけ摘むと台所を出る。理由としてはまあ、最初のご飯は一緒に食べたいってだけなんだけど。

そこそこ広い家なので、移動は大抵が廊下を挟む。かつたるいけど、それでも島に居るという幸福感を感じられるのでいい。

任せられた　言つてきたのは母さんだけだが　家事は料理と洗濯、なので洗面所へ行き洗濯カゴの中身を選別する。

家事にこだわりがあるわけじゃない。ただ、妹達も含め女性は服にうるさいと思うので、纏めずにちゃんと分けて、方法通りに洗うつもりなだけだ。

昔家に居たときは今やつてる作業も全部、母さんと妹達がやつてくれていたんだなあ。

今更に頭が下がる。

冷たい口調で暴言も吐くマユでさえやつてくれていたのだ、いや別に嫌いじやないし大事な大事な妹なんだけどイメージはわかない。

しかしこんな仕事を母さんが任せてくれたのは嬉しこじだ、素直に俺はそう思つ。

ワンピースやら、フリルのついたスカートと言つた可愛らしい物ばかりで、手に取るのに背徳感がすごい。

時折母さんの下着なども出でてくるため微妙に凝視しにくる。

と、これはなんだろうか、ハンカチか何かだろうか少し分厚い……

「眠い…………あ、おはよ…………」

そこにマコが起きてくる、寝起きは素直で可愛い。素直に可愛い。眼が大幅なプラス点だ。

左手の裾でゴシゴシと顔を擦りながら、じゅりを見せる。

「早いねー兄…………つー?」

「ああ、おはよマコ」

漫画で覚醒した主人公が目を開くよつた感じで、ものすぱーこ田を見開く。

その目は俺が持つている、とこか握つているハンカチと思わしき物体を凝視している。

顔がどんどん紅潮していく、とこか凄い、本当に赤くなつていぐ。

「う、うー兄…………つ、それつ、握つてゐのつ、何…………!」

あわあわと口を小刻みに震えさせながら囁つのが可愛い。

何だか可愛い可愛い言い過ぎていなか俺、いやまあ思ったことだから仕方がないんだけれどもね、変態みたいだ。

とりあえず慌てるみたいなので朗らかな笑顔を返す。

「これで落ち着くといいな……。

「何つて、洗濯物だよ」

そう言つて手に握り込んだ布を、手を開いて広げる。

ハラリ、と開いたそれは、丁字（おおまかに見れば）。

「どうか、」ジビも向けつぽいぢょつと厚めの可憐らしーいパンツ
そのもの。

おお、毒舌な妹はこんな純白履いてるのかあ……。これは彼氏を殴
りに行こうかあゝな展開が無さそうで安心。

そんな思考な俺の前の妹様はどうどん赤くなつてしまいには角が
生えそうになつている。

ちなみに角というのは三倍の量なのだ。

「それ握りこんで…………何…………しようとしてたの…………」

「え、ちよ、ちよっとマコ、マコセ々、びつしましたかっ！？」

「う…………う…………」

「う、うの、なんべつようか」

「この妹の、本体じゃなくてパンツにしか興味無いのかド変態畜
生オヤジと一緒に海草と結婚してやがれ変態っ！！！！！」

涙目で叫んで、俺の手からパンツをひつたくる。
ああ……パンツ……。

「ただやるだけで見ちゃったーならまだしもそんな邪な目的で凝
視しかも握り込むなんて本当に最低最低最低つー！」

今にも泣きそつた顔で、パンツを胸に抱えて怒る様子まさに心せり、
愛らしい。

そしてなぜだらつ、少し胸が高鳴つてこる。

「う、じめんっ、気がつかなかつたんだよそれがパンツなんつ

あ、何故か青筋が入つた。

「う、じおの……出てけつー！めえの大それたく
なけりや今すぐ出てけの変態の思いやりのない変態の野郎があー
————つー！」

今度こそ本当に泣きながら、真つ赤な顔で叫ぶ。

「う、じめん」

「謝るなつ出てけつー！」

俺を押し出しつて、扉を勢い良く閉める。
握り込んだのはわるかつたけど……

「あんなに怒る必要ないだらつ……」

少しくつむ。

そこに洗面所の隣の、階段から足音がある。

「おせよついざれこます兄さん、マコの声が聞こえましたけど……」

「ああ、おせよついざわ」

ハンカチと間違つてパンツを握り締めてたんだよ、なんて素直に言おう物ならコウにも罵倒されそうで怖い。でも嘘をついてもどうせ後でバレそうだ。

「兄さんのことですし、洗面所ということはハンカチとパンツを間違えて握り締めてしまつて、それをマコが見て怒っちゃつたってところですか」「

「おお、大当たりだよ。どうしてわかつたんだ」

「兄さんのことほなんでもわかりますよ」

妹ですから、とはにかむような淡い笑顔で付け加えてくれる。なんともこれも可愛らしい、俺が兄でなければ放つておかないと、放つておくほうが人類の損失ではないのかつ。

「嬉しいこと言つてくれるなあ、コウは」

「ありがとうございます兄さん。でもマコちゃんも嫌いだから怒つてるわけじゃないと思しますよ?」

「まあ構つてくれるし、嫌われてはいないと思ひけどね」

洗面所の締め切られた扉を見つつ答える。

さつきのは俺にデリカシーがなかつたせいだつてことくらいはわかる、最後に怒つたタイミングはよくわからなかつたけど。それにさつきの相手がコウだったら、

「兄さんは仕方ないですね」

とか言つて笑つてくれそなものだけだ。

取り敢えず機嫌を取らないと、久方振りの一緒のご飯なのにギスギスしているのは嫌だし、今から一品朝から食べても良い感じな物を追加するか。

しかし二人とも、三年前とは変わつてゐるよつて変わってないなあ

.....

家事が好きなわけじゃないけど（後書き）

パンツイベントとバッタリイベントは必須。後皆好きですかでしょう、私の他のシリアルとかに比べて最初から五倍近いっておかしいよね、本当最高だぜひつはークールがどこかへ消えていきそう。

朝食の風景

午前、8時半。

休日の朝食としては 本土にいた頃からしたら 早い。
あれからマコはむくれて一向に話を聞いてくれないが、この食卓
に並んだ兵器たちで屈服させてみせる。

「 「 「 「 いたします 」 」 」

丸くて大きい卓袱台を囲むように家族四人座る。

メニューは最初に作っていた和洋折衷な献立、米に味噌汁、ウイ
ンナーとサラダというのに加えて、マコの大好物だったはずのオム
レツを作った。

ちなみに俺のオムレツは研究の結果、外はフワフワ中はトロトロ
を再現した物になっている。

「おいしいっ！」「君つまくなつたねーっ！」

「本当においしいです……っ、に、兄さんがこんな料理を作れる
なんて……」

母さんは目を輝かせて褒めてくれるし、ユウは物凄いシリアルスな
顔をしている。

人から褒めてもらえるのは素直にうれしい。献立の栄養バランス
とかについてもこれから勉強すべきだろ？
しかし、褒めてもらえるのは嬉しいのだが肝心のマコは、

「…………、…………」

ムツスーと頬を膨らませたまま黙々と食べている。

「美味しくない！」とか言って突き返されるよりは全然いいんだけど、それでも何だか寂しい。

ここはやはりスキンシップを取つて和ませ、美味しく食べる土台を作るべきか。

いや、作るべきである。

といふことで真剣な顔でマコを凝視する。

「……な、なに」

くりつとした瞳をこちらに向けて、少し顔を赤らめさせている。そのまま凝視しつづけながら、神妙な顔を作りつつ、そう、突拍子もないことを言えば滑つてもコウか母さんが突っ込んで和ませてくれるはずっ！

「マコ」

「だ、だから、なに」

「俺…………俺…………つ！」

視線は顔全体に、顔はしっかりとマコの方を向く。

コウと母さんも何故か何かを察してしまったのか、俺のタイミングの計り間違えもあるだろうが黙る。

この空気はそう、本土に言つて最初の自己紹介の時の空気。どんな面白い人なんだろうという期待の視線と同じだ。

これは、本当に大変なことを言つてシッコミに期待するしかないつ！

「俺…………妹萌えなんだっ！妹が妹の下着も臭いも大好きなん

だよおつづー

沈黙。

そして明らかな失敗。突つ込む兆しすらない。
自分でも、酷いと思つ。

「お前らー、オヤジを海に捨てて家に帰るつてなんだー、反抗期
かー倦怠期かー愛情の 裏返しなのかー」

とんでもないタイミングで帰ってきたな親父。あなたのせいで空
気がさらに凍つたような気がする。

母さんが微笑んだままの顔で、箸を落とす。といつか瞳から生氣
が消えています。

対してユウは驚いた表情で固まつてはいるが何故か嬉しそうなそ
うでないような。

淡く、雪のような肌の頬が桃色に染まる、それはもつ芸術的に。
で、皿の前にいるマユは手にもつたままだった、空になつた茶碗
を落として顔を真つ赤にする。朝の赤さを軽く凌駕する勢いだ。

「真つ暗な森を一晩さ迷つた親父の姿を見てみなさい？ ほうら
こんなにボロボ

揚々と玄関から居間にやつてきた親父も空氣を読んだのか、飲ま
れたのか黙る。

親父がきつかけだつたのか、ゲームのゲージが溜まるときみたい
な溜めの後、爆発する。

「兄さんっ、私に言つてくれれば下着がつまらなく感じるくらいのプレイをしましたよっ！」

エチズム！？妹に！？」

妹達が俺に覆いかぶさるように、母さんも青い顔で叫んでいる。親父は「妹？下着？臭い？」と言いながら不思議な顔をしている。

「ちよ、ちよつとまで冗談だ冗談っ！」

「兄さん！隠し事は無しです大丈夫です受け入れます！」

「受け入れるってなんだ!-」といつかコウ、お前昔そんなんじゃなか
つたる!-?」

「時は残酷です！」

「ハー呪やハゼツセハコハ留であれを……ハー。」

「違うあれば事故だつーじゃつとラシ キーと思わなへもないけど
事故だー。」

「妹に欲情なんて兄として最低！」

「まつんだマコ、俺は欲情していいなーっ！」

「ワタシに魅力がないっていうのか！」

「ある、あるけど欲情はしていないんだつー。」

「兄さん兄さん、妹に欲情するのは兄の務めですー。」

「お前は3年の間になにがあつたんだコウーー？」

「見てください、こんなに可愛い子も書いてますよー！兄は妹で童貞を捨てるのだとー！」

「待てコーミー、キヤラが崩れてきてるー。」

「マコの言いつとおりだぞコウーー？お前もっとクールな感じだったはずだーー？」

「その通りですー！クールですよー！しかしそれを捨て去る勇気も大切っ！」

「ま、マコ、お前なんとか言ってくー。」

「ま、まさかさつきのパンツ以外にも盗つたかーー？」

「また何故そこまで話が戻るーー？」

「ああ、なるほど。我がムスコよ、お前も男だなあー。」

「親指立てるな何に納得したんだ親父ーー？」

「コー君、母さん別に近親相姦否定はしないけど、臭いフェチはマズイと」

「問題点はセレジじゃない…」

「兄さん、もう二度と…です！捨てましょう大切なものを…童貞は投げ捨てるもの…！」

「このポケットの膨らみに入ってるのはなんだ！ブラか…私のスボーツブラなのか…！」

「探せムスメー！兄の尊厳の全てをそこに置いてきた…」

「何を置いてきた親父！後無いから！欲情しないしもつてないから…ってあ、だめ、そこは触るなっ…」

「ゴーミーがいいのか…私の下着は妹のモノでも子供っぽ過ぎてアウトか…！」

「母さん、悲しい」

「父さんは子供っぽいのもこと悪いよ？」

「ゴーミーだつて子供っぽいの履いてるや…」

「ゴウお前なんか暴露されてるぞいいのか…」

「兄さん…」

「ああダメだ妹は両方落ちたつ…両親は元からだけど…」

「冗談が破滅を呼ぶ…」。

嗚呼、学校への編入が明日からでよかつた。

朝食の風景（後書き）

クールビューティーな貧乳妹のスプブラ吸いたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382y/>

sweet Island ~妹達とお兄さん~

2011年11月23日19時00分発行